



Title	ジャーヒリーヤ時代の女性：男に描かれた女性像をめぐる再考
Author(s)	洪, 研
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/101740
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名（洪砾）	
論文題名	ジャーヒリーヤ時代の女性：男に描かれた女性像をめぐる再考
論文内容の要旨	
<p>本論文の目的は、アッバース朝期の知識人によって盛んに語られたディスクールとしての「ジャーヒリーヤ時代の女性像」を手掛かりとし、アッバース朝期の知識人がどのようにその女性像を描いたのか。言い換えればアッバース朝期の知識人の間に広まったジェンダー・イデオロギーが女性の描写において、どのような影響を与えたのか、という問題を究明してみることである。</p> <p>「ジャーヒリーヤ」とは「無知の状態」を意味するアラビア語単語である。ここでの「ジャーヒリーヤ」は知識や学問がない時代を表すのではなく、イスラームを知らない時代と、その時代の人々による横暴と傲慢な性格を表現するのに使われていた。ジャーヒリーヤ時代に関する記録は、イスラームの誕生から2世紀が経ってはじめて行われ始めた。その中の曖昧な記憶に基づく記録は後世のイスラーム学者によって再構築されてきた。したがって、今日の我らまで伝えられたジャーヒリーヤ時代の様相は、その時代の忠実な反映であるとはいえない。また、「アラブ」あるいは「アラブ人」という概念は、イスラーム以前にすでに使用されていた可能性が高い一方、他称でしかなく自称として使われていなかった。「アラブ」あるいは「アラブ人」はアラビア半島における遊牧民しか指していなかったと思われる。本研究の対象としてのアラブ人女性というものは、ジャーヒリーヤ時代と言われるディスクールの時代におけるアラビア半島に日々を送っていた女性たちを意味する。</p> <p>第Ⅰ章では、アッバース朝期の知識人による女性観を概説し、『クルアーン』注釈書及びハディースにおける女性の身体、性及び感情に対する詳説を手掛かりとし、そこにおけるジャーヒリーヤ時代の女性像の特徴を明らかにした。ミソジニー及び男性優位主義はアッバース朝期知識人の思想に染み込んでいた。彼らはこのようなジェンダー・イデオロギーを社会に広げるよう、本を書き、人々に説教を行った。これらの言説において、ジャーヒリーヤ時代の女性による言動はイスラームの反面となっている。この現象はアッバース朝期において、ジャーヒリーヤ時代をイスラームの他者として描いた潮流に合致している。イスラーム学者の考えによると、女性は公共の場所で身体を露出できない。そのため、学者らはジャーヒリーヤ時代の女性が公共の場所で自由に衣服を選択し、自分の好みに従って飾りを着用するような描写を行っていた。また、学者らの考えによると、女性は男性に従い、男性の好きな体位で交わるべきであるという。そのため、彼らは男性の求めを拒否したジャーヒリーヤ時代女性の様子も描いた。さらに、学者の考えによると、葬式において女性は自分の感情を抑えなければならないという。そのため、これに反して彼らは自分の悲しみを最大限表したジャーヒリーヤ時代の女性の様子を描写した。学者たちの目から見れば、彼らが描いたジャーヒリーヤ時代の女性は恥を知らず、正しい倫理にしたがわなかつた。ただし、後世の人々の目から見れば、ミソジニー及び男性優位主義に支配されるアッバース朝のジェンダー・イデオロギーとは正反対なジャーヒリーヤ時代女性像は自由の極みと言っても良い。</p> <p>第Ⅱ章では、先行研究によって盛んに議論されるジャーヒリーヤ時代の女性の職業を分析し、ジャーヒリーヤ時代の女性をめぐる伝承が語られてきた目的及びジャーヒリーヤ時代女性の職業の特徴を考察した。従来の研究は、ジャーヒリーヤ時代の女性の職業を議論する際に、そこで語られるさまざまな伝承を真実の史料として扱う傾向が強かつた。また、これらの研究は専門職ではない生産活動（すなわち自らの生業のためのもの）も専門職のように扱いやすいため、これらの伝承によって築かれたジャーヒリーヤ社会の分業の程度及び女性の地位を過度に評価していると思われる。これらの伝承を分析することを通じて、以下のことがわかるようになった。</p> <p>まず、本章で引用している伝承の大部分は職業について詳細に述べられていない。また、これらの伝承は明らかな目的を持っている。すなわち、預言者ムハンマドの輝けるイメージを作るために、またイスラームを顕彰するために伝えられているのである。一部の伝承はイスラーム学者が自分の主張に論拠を提供するために伝えられてきた。さらに、これらの伝承において、ジャーヒリーヤ時代の女性は、生産活動から排除されないことを示唆している一方、性別分業という現象も存在する。最後に、伝承においてジャーヒリーヤ時代の女性が従事したのは、自分の生</p>	

活に緊密に連携している日常的な生産活動である。

第III章では、ジャーヒリーヤ時代の女性の政治参加に焦点を当て、そこにおける女性像の特徴と後の時代のイスラーム学者らがとった描き方を探求した。イスラームの伝承において、巫女は予言をしたり人々に助言をしたり裁判をしたりする一方、これらの役割を果たせるのは巫女だけでなく、覗も果たせる。巫女に関する伝承は、女性の代わりに巫者の能力を把握する人が、人々に尊敬されることを示唆している。ただし、巫女に関する伝承はジャーヒリーヤ時代において女性が神職から排除されないことを表している。残念ながら、イスラームの伝承は、どのような方法で巫女になれるのかや、巫女がどのような日々を暮したのかなどの巫女に関する詳細な情報を提供していない。巫女は物語を進行する記号のように描写されているといったほうが良いと思われる。また、部族紛争での女性捕虜、女性戦士という二つの女性像及び巫女像と紛争中の女性像を結合した女性指導者像は、伝承におけるジャーヒリーヤ時代の女性が積極的に重要な役割を果たしたように見える。しかし、これらの伝承は女性が受動的な道具あるいは男性の力を借りなければならない存在であるという見方を密かに広げている。本章で挙げられている伝承の一部は従来の研究によって盛んに引用され、ジャーヒリーヤ時代の女性が積極的に重要な役割を果たした証拠とされている。ただし、このような研究は史料の信憑性を無視し、上述したような物語に存在している男性中心主義の要素の域を出ない。そのため、これらの研究は男性中心主義のプロパガンダとなっている。

第IV章ではイスラームの伝承における子殺しという慣習を再考し、イスラーム学者がジャーヒリーヤ時代の女性の被害を誇張した可能性について議論した。『クルアーン』注釈家や歴史家などのイスラーム学者は、子殺しに関わる伝承を盛んに語っている。数多くのイスラームの伝承と異なり、子殺しに関わる伝承は単なる空中楼閣ではない。一方では、伝承と比べれば信憑性がやや高い『クルアーン』もこの慣習に言及している。他方では、アラビア半島とその周辺地域で発見された碑文、すなわち考古学的証拠はこの慣習の実在性を示唆している。しかし、伝承、啓示及び碑文における子殺しの様相が微妙に異なっている。『クルアーン』の文字は子殺しと女児殺しを述べている。ただし、『クルアーン』注釈家や歴史家が盛んに議論しており子殺しに関する伝承はほぼ女児殺しありと述べていない。男児殺しも子殺しに含まれることを示唆している伝承があるにもかかわらず、重視されていない。また、碑文の意味は曖昧であるが、男児であれ女児であれともに子殺しという慣習の犠牲者である可能性を表している。もし、イスラーム学者が子殺しについて女児殺しだけ盛んに議論してきた現象が、アッバース朝期の学者による特定の結果ということであれば、女性あるいは女児だけを子殺しという慣習の被害者とした行為には少なくとも三つの意味が考えられる。女児は女性と子供という二つの身分を持っている。イスラーム学者の見解によれば、女性と子供を保護することは文明を誇示する道徳的な行為である。女児だけが被害者であるというイメージのため、ジャーヒリーヤ時代はより野蛮かつ無道徳的な時代になった。また、女児だけを被害者とすることを通じて、イスラームが女性をジャーヒリーヤ時代の悲惨な境遇から救ったというイメージを強化した。言い換えば、イスラームの合法性を強化した。さらに、男性を被害者から排除することは、男性の絶対的主導地位を確認した。生まれた時、命が他人によって支配されるのは男性ではなく、女性に限るということである。

上述した描き方にしたがい、アッバース朝期の知識人は畸形的なジャーヒリーヤ時代の女性像を作り出した。ここでの畸形という表現は四つの意味を持っている。まず、アッバース朝期の知識人がジャーヒリーヤ時代の闇を表すために描いたジャーヒリーヤ時代の女性像は基本的な道徳から外れているということである。次に、畸形はジャーヒリーヤ時代の女性が人間として扱われておらず、記号や男性性の証明や学者の道具とされていることも意味する。さらに、ここでの畸形という表現はアッバース朝期の知識人に悪しき範例と見做される一部のジャーヒリーヤ時代女性像は自由であることを意味する。最後に、畸形はこれらの女性像の一部がジャーヒリーヤ社会において重要な役割を果たしたように見えるが、実際に男性中心主義を伝えていることを意味する。上述した分析を考慮に入れば、大量の研究によるジャーヒリーヤ時代の女性像を用い、イスラームが女性を悲惨な境遇から救ったこと、あるいはイスラームが女性の元々持った権力及び享受した高位を女性から奪ったことを証明する方法が荒唐無稽であることがわかった。ジャーヒリーヤ時代の女性像は現代における我らが女性をはじめとする社会的マイノリティを語る際に参考すべき悪しき範例としてしか扱われることができないと思われる。

本研究の限界として、まず取り上げた伝承の数が比較的少数であることを挙げなければならない。ジャーヒリーヤ時代の女性に関する伝承は数えきれないほどある。研究結果の代表性をより高める余地があると言える。また、本研究は主にジャーヒリーヤ時代に関する伝承に焦点を当てているため、アッバース朝期の男性知識人の思想に関する考察が不足しているかもしれない。今後は、より多くの伝承を集めるとともに、アッバース朝期の男性知識人による思想を深く考察し、本研究で得られた成果をさらに精緻なものにしていく必要がある。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (洪砾)		
論文審査担当 者	(職)	氏 名
	主査 教授	近藤久美子
	副査 教授	深尾葉子
	副査 教授	竹原新
	副査 准教授	福田義昭
	副査 室蘭工業大学名誉教授	松本ますみ

論文審査の結果の要旨

『ジャーヒリーヤ時代の女性：男に描かれた女性像をめぐる再考』と題された本論文の目的は、アッバース朝期の知識人によって語られたディスクールとしての「ジャーヒリーヤ時代の女性像を手がかりとし何故彼らがそのように描いたのか、彼らの間に広まったジェンダー・イデオロギーがそこにどのような影響を与えたのか」という問題を究明するものである。

第Ⅰ章 「身体・性・感情に対する規律：悪しき範例とされたジャーヒリーヤ時代の女性像」では、アッバース朝期の知識人による女性観を概説し、クルアーン注釈書及びハディースにおける女性の身体、性、及び感情に対する詳説を手がかりとし、そこにおいてのジャーヒリーヤ時代の女性像の特徴を明らかにした。本章で指摘されるのは、学者たちの目から見ればジャーヒリーヤ時代の女性は恥を知らず、正しい倫理に従わなかったというが、後世の人々の目によれば、ミソジニー及び男性優位主義に支配されるアッバース朝のジェンダー・イデオロギーとは真逆なジャーヒリーヤ時代女性像は自由の極みの中にいたということである。

第Ⅱ章 「ジャーヒリーヤ時代女性の職業：伝承を語る目的と伝承における性別分業」では、先行研究によって議論されるジャーヒリーヤ時代の女性の職業を分析し、その特徴が考察されている。ここでは当時の女性たちが生産活動から排除されないことを示唆し、また同時に性別分業という現象も存在するということで、彼女らが充実したのは生活に緊密に連携している日常的な生産活動であることを明らかにしている。

第Ⅲ章 「政治参加におけるジャーヒリーヤ時代の女性像：記号・弱者・男性性」では、女性の政治参加に焦点を当て、女性像の特徴とのちの時代のイスラーム学者らがとった描き方が探求されている。イスラーム以前の巫女に関する伝承を探り、部族紛争での女性捕虜、女性戦士というもう一つの女性像を結合した女性指導者の位置を示しつつ、これらの女性たちは男性の力を借りなければならない存在だと語る史料の信ぴょう性を問うている。

第Ⅳ章 「子殺しをめぐる言説の再考：ジャーヒリーヤ時代女性の被害に対する誇張」では、クルアーンに述べられている子殺しについての伝承を、ジャーヒリーヤ時代ならではの野蛮かつ無道徳的ものであるとすることについて再考を行い、男性の絶対的主導地位を確認している。

終章 「畸形なジャーヒリーヤ時代女性像」では、以上の4章で検証してきたジャーヒリーヤ時代の女性像を、アッバース朝期の男性学者たちが作り出した畸形な女性像から解き放ち、これまで当たり前のように言われてきた抑圧された女性像について新たな視点で切り込んでいる。

史料が少なく古い先行研究の断定的な視点に対して、できる限りの文献に手を伸ばし、碑文史料まで読み込んでジャーヒリーヤ時代にこんにちならではの読み解き方を行なった本論文は、博士(言語文化学)の学位を授与できるものと判断した。